



左此志遠理

天



いふやうな事なればいふ事なれば
くわんをたふさるる口くさるるいふ事なれば
浪分あらばいふ事なればいふ事なれば
ふいふの事なればいふ事なればいふ事なれば
あひふもそハ俚俗よりいふ事もいふ事なれば
白上り一浪子あつたしといふ事なればいふ事なれば
ふいふ事なればいふ事なればいふ事なれば
いふ事なればいふ事なればいふ事なれば

あつちのきりぎりすと向ふ店にちか出は
うしなひくたかありとて此一條ハのし
きるあむるにやままとほ蕉門ハ
瀧奥ハはさすにともきかき他は
あつちのきりぎりすと向ふ店にちか出は
うしなひくたかありとて此一條ハのし
きるあむるにやままとほ蕉門ハ
瀧奥ハはさすにともきかき他は

あつちのきりぎりすと向ふ店にちか出は
うしなひくたかありとて此一條ハのし
きるあむるにやままとほ蕉門ハ
瀧奥ハはさすにともきかき他は
あつちのきりぎりすと向ふ店にちか出は
うしなひくたかありとて此一條ハのし
きるあむるにやままとほ蕉門ハ
瀧奥ハはさすにともきかき他は
あつちのきりぎりすと向ふ店にちか出は
うしなひくたかありとて此一條ハのし
きるあむるにやままとほ蕉門ハ
瀧奥ハはさすにともきかき他は
あつちのきりぎりすと向ふ店にちか出は
うしなひくたかありとて此一條ハのし
きるあむるにやままとほ蕉門ハ
瀧奥ハはさすにともきかき他は

かのほのぼののたよりをさるはめおく
なまやまとのこゝろに書はす
何し身もくさくさのこゝろをさる
あつとん公にささるとふあつとん人
なす岡よおとつたつとんとすあつとん
紫松菴よおいととと無何書

自序

定家寂蓮西行三仙の秋の黄昏の歌三首をこた
と淋しき体の最上とす流滑の漢句をたるとかんさつり
と冠さるに先寂莫の地をんもとめそ句を巧より終は寂
しまつ躰となりて題のかんさつりハ用とちありそまの
書あり不謂立光井許六落柿舎去来は書をて因は
答—もの也事ハサのよま知まてこれを又るに蕉門の
奥旨をわけつらふのもう翁の句法はさひまをりといふれ
あるは許六いすい直指たさり—あつとん光のえ—め二つの

と—去来これと六はすら—なりとさハお覚れと
はつと相み—あつと年来ひみ垂—う今杉蔭の風八隅の
葉末もつくり際なふり海のとく流布さるるの泉たたく
山は斧振川は筏のる男あそこれいそぎ信ハなり—さりヤロすさひ
寂し人とのつとも蔭の句乃寂—まハかし枝は鳥のととのりら
乃鬚蓋張の風骨のかつひよりなりと—か人声も麻を聞こ
あらんさひといて夜のいとほの苔むすど或ハ鐵釘も鼻あつ
冷つ—人ご志をりといて糸井の調の甲も入諷もた知
なを音色も等—くたより或ハたのすもま—ぬ山路は標木
まる枝れともたほゆる—書中ハ曰志をりさひハ趣向詞器
の閑寂なるはつりあつとさいと寂—まハ異なり志をりと

憐なる句ハ別なりとあは落柿舎五光井の流ハは書書の
とつりあらんをれと今世の人多傳—ともたほえは傳つと
い—とも容易も形す—くもあ—そといよ梓め—もたす
き奥儀を睡するに似—れとた—踏傍も蕪い—と兒
かりとも蔭の風をた—とまおハ皆是同志の友あらん四海
兄弟友つきん何より隔えん親疎—人の器よある—秘事
とも—せ—我放蕩ハなうく初學ハ幸あらん今是を頭に
不信の葦ハ—信深く額お上—くを蕪門あたより
おれくなりさあ—ハ秘—て蠹とあさんや顯—て玉虫の
光めて—人やあふ—こ蔭去来許六の三哲ゆれ
さ—めとる

懷居士一音述

凡例

○末書曰ハ許六の問也

○去来曰ハ答也

○文中其角子贈文とわらふ文次は顯す

又その角子つゝ文を彩りつゝの序とつゝあるまはらるゝ

為集集りてえへ

○は問答ハ蕉門の奥旨也學者必熟讀會味す——猶附録の書

わら最論文等困のものはわらるるを續篇として梓著

は書に返る見(ま)ハ許六篇突とつゝめ去来湖東問答猶見(ま)ハ

去来抄 合四篇なり

湖南の許六雅兄予其角に贈る文を讀て疑難を
書し一日予は與へらぬ信は風騷の人也予書
して其論高し予不才當へらぬ然る微意を
述て是を辨す是亦のこなきハ阿兄正し
來書曰十歳不易一時流行の二ツを以其角は女性
論せしむる兼る其角は器をわたりく知終る故に
生得おの苦めは志なく人の辱しめを志しぬゆゑに
返答の詞とすく却辭をいふより若葉集の序とす
是とつゝのを志しぬゆゑ也
と來曰は難阿兄の言より予亦おのこなきを以て是と

同答

贈る是と弁して俳道も益なり一管筆をささぐ一筆は
来書曰然といふも予は神と戯て相撲と晋子の方
に
之寸又諸門弟の句をあらわし

去来曰阿兄の言信一予是も同く文中過分な
も然衆一終つ事なく終

来書曰慥に眠を彼てえらに近年緒集のくち
目之句あはれき大方晋子なり

去来曰阿兄の言意信といふの書は角の佳句の
多とすもや近年俳書みくちたあくえら此
書角の句十ありて貴す一也一也一也一也一也
俗を世る平くの句之浪化集ありそ山に角の撰集

多句を並べても中阿兄の句のゆひより角の句乃こ
とくれを能きといふは乞をえん

来書曰かれは及ぶ門弟もみえぬ

去来曰是れをくハ阿兄の過論をん角の才
の大なるをい論せハ我かかと頭よいさくも角の
句乃ひまきをい論せハふうはを脚下みえむいんや
後哲の人をや予九て是をいあわす同門の句をけ
る恐ふ者み六輩あり阿兄もき一人也

来書曰おんそや七師の句を對一等一くんと
論せしゆハ希る高牙乃誤といふ

去来曰阿兄のけ論精審をいん予々其角は短文に

亦る師の吟跡を齋しうすと云せり阿兄跡の字に
カと加給へたると一日二十里と東りする者あり
又十里と東行する者あり共の跡を齋らす角を
その在りする者あり昔日を夏日いふより
名人多しといふもはくめつ假語の跡を入る人
は亦齋の角をいふて曰吾子う言ふり初る假語を
神を入る人ハ我齋也云来是を聞て吾子之言も
亦一理ありと二言意味稍異といふも共は先師を
以古人のまゝにすすむ人そ齋の師とひく
さぬとくまづんや

来書曰予不審あき師遷化の後諸門弟の句に

秀逸のおさぶきいふ也

云来曰け論強う云を流すへん師教厚く遠
く我意日くに生れ秀逸のおさぶき乃そまわす亦る
その血脈を失ふ者ありむひりけたるこよ限るん
又云秀逸の事ハ先師在世の体といふも稀むむ
又遷化の後もなるといひふが世然とも今の世も南
ても秀逸を言ふ人難そやむく先師凡兆
告て曰一世の内秀逸の句と云あむ人ハ化者なり
十句に及んむ人を名人に又先師人の句の奥意
み叶ものを集て集と撰むく終る是を笈の小文と
辨すと云ふ人あり故有て予々名月の句と入集す

と語嬉へり予曰ふ句撰に入るる句いくはく有や
 先師曰汝る分の事といへば始る我は後の集り入む
 句五ツ持し孰者ハ誰れ歟人是をんねりしや更に
 秀逸と云ひ世に稀をばし凡先師の門人の句を
 賞し終ふや相尚の称羨有過分の称羨あり門人
 乞ふねりておとひとより自尤て終り己う位を志し
 さば人も多し又半途より自顧て悔しむ人も
 これあり予う不敏といへども或ハ秀逸名句或ハ句
 おもあふんり或ハ我風騷汝達一あ士と云むこれの
 賞詞感文すくちとせし志くも退てけと師の句に
 正寸時を雲沈の遠ありけと同門の句に合する時を

群をんかひたれも貴の才を懸せさば事を志れり
 又秀逸の稀なる事を志れり

来書曰近年湖南京師の門人不易流行の二つあり
 志をりさひまゝあはして真の俳諧を失りといへん
 去来曰け語阿兄の真旨なきありともまねいて是を辨
 来書曰予たあく同門に對して句を論するに詞乃續
 さひを付さんぞと云ふは一句れも志をりまゝと云
 多る句とせし是態を刻琴柱を膠するたひをんり
 去来曰け論阿兄のこゝむと共對し終り人三編也
 凡志をりさひハ風雅の大切にして忘へるゝあたも随分
 の化者句くさひ志をりとけりまゝにた先師のこ

られあり今日お尋の他者ふんをさひしり乃
なま句をいひすらんや是をたふ祿うやといふ人其
ひ及なり又有ハ其にまゝいふといふ人いふは是を
厭推人いふもいふもいふもいふも論世ハあまたく
口とほくまらんまきさうし又壯年の人の句いひ志を
又えさるもあらずといふ人又初人の句いひ志をハ
さし志をを容易ましくいふ人其吟口閉す
新味さうはまがしは先師の教也

又云志をりさひハ趣向言葉善乃困寂なるをいふに
あしすさひと寂しき句いたる月を祿うて外あし後
もの言語等其といふらかういふは強ていふといふ

さしハ句の趣あり志をりハ句乃余信ま有るはも趣向
も詞器も又撰らんハ有るハ詞器よりといふも趣向
掛くハ塩塩々面ハ西施ク鼻を流るはくも人趣向
よしといふも詞器よりいふハ又梅花の上ハ真哉
冷々は同一かむ豈是をいふがハといふ人ハ
人信せんや

来書ハ曰一句はつらなりと人あはれもさういふは
自備りてあはれなる句もあはれ

去来曰雅兄の言たういふをいふをいふは
趣くハ掛ま句をいふは師の句を伺ふハ嚴なる
もあありやさき物も賢なるものをいふハ実神なるは

此遠をゆもたあり平易なふあり健なれありあま
なるもの有りぬほくなふもの有りくるハ一と相お衆
れ千姿万種ありといふもさひ志をりあまは句を
ましなり阿兄よく先師の句をんかんを語へは趣向
詞番のさひと憐よよと證也

來書曰又平年漸四十二血氣いすなまらふを句の
あまをやくにえゆん

來曰阿兄の言をす一と然とも阿兄謝光の名を語
一とさ句にさひ志をりあまは人愈せすといふ一と
雅兄の他こは蕉門の秀なり句さひ志をりあまをん
み人るなりとせし

來書曰然とも光の來るんをいさひ志をりあまを
つと求ひしとせし

來曰阿兄の言を感涙す一と然とも求す一と至る者を
生得の人なり阿兄の心口風騷ありて志もなるといふ
事切なり然とも平あまはもはたもいさひ志をりあ
ま次ハ思つともいさひ志をり蕉門の諸生千萬人と論す
時ハ先師よこえし者もの多しいさひ志をりあまを
一人をまり守おほくハ是れもいさひ人也阿兄世を考
生得の人是を願ひ名入る至一と聖ハ願ひ天に
至一と古人の確言あますや

來書曰詞をかり志をりあまをいさひ真の俳諧は

去来曰阿兄の言的中せり詞をなかりて是をたき
誰う是をかごととせし強る詞をいなき踏通
か句のそととせし詞をなかり他るとんを用ひ影を
亦同日の論ありん

来書曰只一句の姿を俳諧わく捨るものい有あ
去来曰け論阿兄たもいさるの甚之宗濫貞徳よりこの
うの教人の名客甚凡いつれ俳諧の姿かーとせしん
然とも宗周用らして貞徳すより先師の次韵起する
信徳う七百韻甚ふ先師の變風をたけるもみかー栗
生しく次韵か甚冬の日おてみかー栗落冬の日ハ猿蓑
みねは猿蓑義も炭俵を破られりを用捨時不

かいつと歌句あるを千歳不易の號を起せり去るは
ともいふのすくなくれは人そ是を捨る人か
とせし

来書曰不易流の二三うまさとつハ平きく勇
て趣向もくうます句はも出さぬら不不易の句
をせん流りの句をせんといふ他者湖南の沙汰也

去来曰は平きくも湖南の人と故ありそいふを
今愚をかへしみて是をたつこの當時の風を願ふ
ハ平生のあはれ趣向句はと前後を論つて句を
に至てハ感偶するも然ハ趣向たのつてあり苦業する
も然ハ先趣向を業す趣向流いりそ句はつて思ふ

句を人とする時或は新古の風あるその言風たるも
 いくたひも拂ひ捨てたる新風も叶むと守新風術
 いりて句さへもれ志うは流りをおふ事、趣向
 の後句乃前といへん、こゝに平生の業一姿なり又
 不易ハ一たひんも流りて変するものなり故に事切
 りおりの切も捨す平生も離さるもの、流りの句は
 案する中或は不易の姿かひ来まハ別取て以是
 を句と寸是を旧深の凡のこくを婦と相おあ、あ
 平生の句案ハ只旧深と新風と秀句お人事、成
 おり不易と流りを捨すはよいと流りて又不易
 流りを分て案する事故ありていふ事なり

いふ或ハ奉納賀追悼賢人義士の類の賛のこ
 とまハ必不易をい句案するを要と寸又著題風吟
 あるいハ代門の人と對して尚流を命のめり、或を
 新風をいへんといふ人といふこのときハ皆流りの句を
 い専に案すといへも湖南の正秀ハ先師遷化の日
 予に語て曰く、より後流りたるものさしり未を
 不易の句をたのしむ人といふは皆ハ皆故ありと
 いふ又系流りたるもの、案すハ二つを分て案する事
 もあへん又吟友の會遊興も乘りて流りの句を志
 て見せん不易の句をいて聞せんといふあり是を
 た、時を取ての放言、句の秀拙と成不成を賢愚

風雅の誠とされぬ也不易哉と云ふそれいふ事さうそ
はりの句は學ひよて風あつたをいふ能く不易を
志す人を往とて一かきしつて一かきしつて
〜と云ふ一時流りの秀とていふものもたねの口實
乃時を運のよきに代日流り乃場を至りて一歩も
あゆむとあつたて退てねまふ其角子ウカお
侍りにあつたふとていふも且方九一曰く輩のこ
〜と云ふ管見に息つたて道とがかり所とてはるる
たらひのあつたふとていふもたねの口實に
等〜と云ふ〜と云ふも其詠草をかたりみよハ不易の

句にたつてハ頗る奇ぬと振つて流りの句に至りて是
を兼そのかあじきをたつてはるる角子の世との家匠蕉門
乃高角く都ら吟跡の師といふ〜と云ふは法生の
迷ひ回門の〜と云ふみか〜と云ふ乃日汝う言ふり然とも
凡天下の師〜と云ふも然ハ先己の被位を定さるる人趣
をたつて〜是角く旧姿をたつて〜と云ふは〜と云ふ人
流りに流りの〜と云ふは〜と云ふ人〜と云ふ
雲煙の風も変するうと云ふ朝暮が〜と云ふは
此も跡なき人事をたつて〜と云ふ狂客〜と云ふ風雅の
宅と云ふ〜と云ふ〜と云ふ流りたつた〜と云ふは
たつた〜と云ふ〜と云ふ〜と云ふも又お勵

むね便なゆ——去来り日昨の言かす無きつは志れ
とも都立風を詠まわつる本哥といつて代々の集能
格向——況や侘諧を新——を以て新とす本歌
代もつて憂す無き——はたる年をもつて易ふつ
氷雪乃流きもとゆりて動さね必汗襟をきせり
今日緒まのめ古格を改まるとも杉永く此ま
あつハが角をひく紐乃菜刀なりと世人公翁曰汝
言慎——角や今我り今日の時りおねらゆとも
り東とこころ新風流を吐き——東とむも志るつは
来日さるるあり是を侍り年月わつむこと我歌のど

つふやま退ぬ翁なつなり流ひそむれ——つとせれ
ま秋を流ぬり今も生と我東西雲霧の恨といひ
つりといつとも杉松柏表後乃齡とこつたり幸に
言と書——業下はねら先生是といふ人——
流ふや

丁丑の——壬二月

落柿舎岷峨去来辞

念乃記

少きもあつて言ふ念乃貴人妃乃

私去予の正持の草稿より貴妃とあり略通る事なきも妃を消して人と傍あり

記念よりはたしきも念乃の哀傷とす綿帳の夜の
志と念のよきは響響のなきはぬひまはるの
川のはたききんののら世はたうと川うまうその肌をく
そふほひとくまの母とや恋は一物とせし人
むをなりとししとや紙の念をき念もあつて
吾常もあつて海士の答屋乃響はたしとひ驛は
そふぬ乃のせきとらひておねの園をたしとらふ
そふもあつて人のほろりたしとらふとらふ

題食四季

竹戸降

花乃澄眞露一そるむ交食
むかーのれもさしむ食れ
ちうぶおれ福もれや交食
肯かーて初書人そやけさるゆ

い句ハ後集集々入

私云竹々の辨治まで去るも食着なり一ち如行の祥かあり
義の獨府なり後切居く一人ともあま人倍れ
は食五篇の記をんておひま今風の風人ふか風流あり
いとくまういふま事ともなるせめて似せるとてもあら

又去條の記ハあま義濃の人の様はありかへめらふま
一ハ陸通のよまよ改む今世の人は風流をよま
五篇ともあら

いろもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
さめてのらもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
なるものもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
皆みもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
食ひもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
ま草のまもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
の山秋篠の里もいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
まもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

のちりつよほつむらひすゝたのしつゝあはる
つゝも地氣一身旧里とてふれをさうしむ
肉眼のつゝまききたあひつゝ麻の後のつゝを
きたつゝらふまかしの念のしつゝあはる
と肝を渡つておぼえ侍る紙とりのつゝあはる
目を追つてつゝあはるつゝあはる
あはるけつはつゝあはるつゝあはる

洛通歌

あはるあはるはつゝあはるあはる

阿菟を世尊入滅の後に来り孔子の周のあはる
いて眞房にあはるや庭の松まゝつゝあはる
らに芭蕉老人のあはるつゝあはる
西川の跡をまゝつゝあはる
ひま松崎白川をまゝつゝあはる
雪車のつゝあはるつゝあはる
あはるつゝあはるつゝあはる
あはるつゝあはるつゝあはる
あはるつゝあはるつゝあはる
あはるつゝあはるつゝあはる

雑話

かゝる文の學おぼやかとなくつりて大に廣ろりなく
唐人も頗あめしむ時なるも流俗の言は裏家貸し
表家とくゆとゆと和哥ハもより言靈のたきく
我朝の宝器なり和歌ハ連歌の表家^{オモヤ}とく俳諧とあハ
戯^シとよ等^トといへも千萬世量の思とく守とく
連歌の底を借て富るるり覺ありそのちなるとあハ
くりといへむさくはるるさくして居む家建んと
まけさるるもの先を礎を平均とく土臺を究むと
志うと柱組あり貫あり枅あり垂木ありかゝるる

高して家倒て過かりぬよふ本工を撰の間架布直
まゝ敷き座坐るん安ん事とねもつて也土基とて云
つむと登ハ幾句ときいんいんを才之の苗で文字を
何故で文字よりといふそ月花の定座およひ去嫌の式ハ
何のめまきともねと彼や是確と教との始とあり
さうすつーこれと土基成極るといふんはくく俳諧狂句
み遊ふ人半ハ師傅といふもなく慢は口すさのいてより
い川えーともなく己こり文後利根を己くまといて
彼の集曼の抄相とておぼるに始りともいへ不埒も
堪能おたよりて同事を恥ハくねもぬらね終り至
つふも至るさあり
おりの今めくくんの意を低くなく却て
さする人もあんなおりのひがてくおもて

今ゆくりとゆふ人己く、學の初を顧よたつれいさうりの師み従いいうるりの
る習ゆーそまういへ今時の學、古人の他ー書よりて正さくらんま正すま
ものふー只己丸をいすむ又今時の人の習得ーも師いいうるりの
師より在ーよりく思ー
師も事を習ふまゆありいん信切の師なりともいへるま
知れや斯あるはさとせるやと才子の問さるまで一こも教る所ハ
稀あるん問は答の暗くさる師を在とも問ふ人のんたそく
何く言つても弁つた事、穿つて深く執行地踏み所狭ー
登ハ高階を人負れ登り頂上ま至てたのれ高ーと臨々
正すあん師一言おさハさ一言それハ何故そハ何く左ま
てまゆやと幾度もく問うー問うーせまぬ事ハ底の
ぬけくる學道といふく人く一隅を挙て三隅も及す
方あつたこそあれおろろといふとも左まおせる條く采心も悟

一 毎句やいなやかえりのりまゝとておもふ人もあらむ
決定知りやまゝさるやハおのれくと己ら公の居探そ
まゝ考まゝ歌一からまゝ棟と覆えりり書
籍とんるとも師の半學もまよえ一

對師可穿問條々

- 一 發句切字との事の別取并格字といはん事
- 一 脇五躰といへとも相對小究るといふ并てはな苗の確
- 一 茅之古人曰才之苗ハての字て然とのふ意
才之よスミノてあんとつまもたあぐハあはと一ハな
ハ確古式ハぬせしそ謂才之の姿ハあ句の中ハ混雜
てもこむ才之と後しんかさあし後の方ううなるおえ
不叶と云を問へ一又わうもはスミツのううのうと
古人の教あり
- 一 茅三のに苗リ容易なるんと或連歌者流の人ナキ

これ等の句を口ひきく異の句と同へ

神佛へなる祝詞或ハ法樂の句なるとハ大方イニタ頌ありて
これより五音の法ありと專あるものと傳授
よりなると口ひきく異の句と同へ

ひなはけるや舞つてなり一庭の春

くる句せまゝもあはれぬの豊横の連音
此句吟一ノムよやマヒツラナリニと續也

まゝなり正親句とり事と同へ

夢想用と事傳るといふも一庭の宗匠或功者
なりてハ用なる事なる一まゝ愛を家一人狂く
しも己と相對脇の句なると次で席さくもあは

いんたけーやまの傳授なりとて誠は一事かと

傳授なりてハ有へん祈禱の俳諧是も同へ

後表用古人の傳授一詠草と手本なりて古実古式なりと
用ドつてまゝつらぬ不素の人ありあはれはまゝとつらぬ人
これよりつけても己の夢の誄なるを顧よ

一花お系は短人付るものむすひ短冊とや事傳るとなま

く知人ありとも何故は初のとてとつて細志あり人も
作り凡家のたしなむはるのそめて人あり初め
くけさふんけきあはれ

誦諧狂連歌となりて連綿と續句一巻首尾するに
ゆり去嫌の式ハ法傘をうめなるとおもふの類より何れ
何句去打表を嫌二句不續相歩越を嫌相二句去去ものと

松尾のそらんてお越を嫌ふなまの二句をハのそらりみ
 事と二義に分て書頭——ハ何故といふ人類のそら
 一季のこの扱子二ツ二ツ挙ていふんに登ハ蚕ハまをて蚕飼
 ハ隻どきと寸夕歌の花ハ夏寒ハ秋なるを干瓢むくを
 夏なり若葉の花同新割若葉の類いふそらりもあま
 けホハ言く人知といふも初葉の人んをまはさんはあれ
 ぬなる——けは風土の春秋時候の夏異ても遠ありそは梅くのそは有ハハ
おしゆりていふ寸 昨も同—— 扱を細密に正して廣く扱——
 むう——史邦の翁ハ俳諧の式法何まの書を用傳ふんと
 伺ふれを誂毎言ホ先直うと——とまかん——
 先とのま字心付て及ん——

けふかにか干瓢むいそ遊とや 翁

けふかにけやあ月ほと文は 晋子

二ハ春の扱一ハ——あまのこ

さみされやかひと顔ふ素の畑 翁

蚕畑ふ人を古代の姿うな 曾良

這おようひやう下乃暮の声 翁

けホの句もそも知ア——翁の素の畑支考ハ素葉なりと
 評せりさも有つてが予上毛をまを蚕畑の人まを——け業
 とまて素の畑なることを知れり

袖珍抄の序二

誂諧傳とらふ事一せみ周く多——予逢春一道は顔ハ

氣力を借りて寸神を託し一因縁を尋て時々妙あり
語事なくいつちく寸あり我誅諧を師とく者
五人あり師をく師とせんといふ成徳の時日あり
指合なりといふ人なりハ句者とといふ人こそ是成徳の
本意は境をき要外なり浄傘の有といひ又足らぬを
光宗匠のい稀くあり貞徳より浄傘をき本
をくといふ道の料の謙なり一座の了りもあは
せし高情ろろとといふを本意少く手亦を無ハ
姉小路殿の一卷添拍也堂上の面々各けてはをえの外は
誅諧を日本のといふ也口受法をきく依て宗匠と呼
答人片腹いといふも諫言なり 芭蕉

又或書子貞徳の丈徳なる誅諧なるを蒐とく
つよや人のいぬる宗周又大徳也宗周ハ誅諧中興乃
用社也 下畧 たしせん

これより證也學者のいふ事之を師より
問ふ

一 古人曰といふの附合ハ人といふ合も同一と
又翁曰一卷の遊ハ文藝の上あり也といふ後ハ
及古も同然なりと

季吟 勢終の月夜と云なき草子の中に

は書文章多くも流落の文章草めて面白き書こ
いは書肆と尋はとも不有なりと評せハハな

鞠げるといふもたつたの舎まを似たる境能ふとす
りける時ハかゝりてまを蹴が—ていとおどけてい—侍れハ
つめあさ—ぬ不埒の人もみ^{かのま}てなごり成り—侍
松子もそつひまらひるまらねりい—とも—つ—お
やうそそつく—たまきせんと曲ちのほかにかちか
あいつもさ—て場もさあぬ—又昔—ふかとお
句う—な—た—た—け—や—り—な—ま—あ
又せん—そ—や—傍—な—あ—の—か—り—え—ま—
て次の句のよ—つ—も—あ—ぬ—よ—せ—た—ま—ま—り
つくぬ—と—あ—い—な—ま—り—な—ま—り—人—の—ま—ま
むげ—ま—ま—な—れ—ま—り—な—り—の—人—乃—と—ま—ま

らのもま—つ—た—れ—ま—ま—の—か—ま—ま—ま—ま—ま—ま—
らぬ—ま—ま—ま—ま—の—ま—ま—ま—ま—ま—ま—

同—書の四

伝—と—ま—ま—ま—ま—の—ま—ま—ま—ま—ま—ま—
つ—ま—ま—お—お—お—お—ま—ま—ま—ま—ま—ま—
い—ま—ま—ま—

ま—ま—ま—ま—ま—ま—ま—ま—ま—ま— 季吟

ま—ま—の—人—の—ま—ま—ま—ま—早—下—謙—退—の—ま—ま—ま—ま—
今—の—世—人—會—席—ハ—り—り—り—り—風—交—ま—謙—退—辞—讓—を—忘—
ま—ま—ま—ま—の—式—法—も—ま—ま—ま—ま—と—ま—ま—

ま—ま—ま—ま—ま—ま—ま—ま—ま—ま—

なまじいさへんてあめなまじい

一 後句哉苗のたのなるはらふ受りておろくもあはれと初学の人のいささうこれを論す

万葉官學者流曰哉はもとより疑の文字まていふはともういふのともえ也か。ナノ反か歎息の文字よ添まるといふを易くして和歌宗匠家へ親炙し傳る地下の達者もいふ事察す不義ぬ哉ハ文字まういふは言語一首一句乃意よりあはしてハ正しく又同哉ともりの和歌ハ免許なくしてハよむる能はんとありたは傳るや答さなりか。まものめて協するゆ急傳とてよませはぬまたりとを狂句者日用なむをきんはてふ一義なり

師傅あはてハ叶はる

後句二ノ句の腰みで文字あるを哉もろ合とて嬌ふ近世おほくハ此を別なき句あはれとて此での字有ても苦くぬ句も有てか。なまよまはあはれとて證も連歌後句の哉苗りよ此での字あるハまじいと云ひ能造と体ハ別なりともてよをそむてめつうの苗り哉ハ二義を有つてあを果おほつうなれ哉苗の句ありいかに習はるはらある己を悟て他をいふやなれと先哲のいかりあはれと他の罪を以て自を正す一予此等の事覚悟せりといふもあはれ初學の教師を標て習傳しなむはとらなり

夜臥うと人まゝで月見うさ 翁
病后のおきこみ落で旅寐うさ 々
ひやくとむちをよまうで昼寐うさ 々

は三句の翁よはでの字ある小笛なり一分別して證とせよ
八九るやうある小笛 柙一のれ 々
狂句ころころの牙ハ弁斎お似るが 々

柳の句八九るの割席のぞ捜一狂句ころころハ弁斎のこのめ
そして哉笛の詮まハ沙まといふ翁の句あまの者とい
いつてもこれホを先ハ小とよりん好一

京中のお粉買あけてのみちが 兎士
は句狂の人も耳おとらき一句なるよ一での字も小笛

翁よさうとんよかき〜法集の中ああ〜ありん合々
師も同一

猿川を猿の小神のきぬさか 翁
煉掃ハねのう棚つる大工を

翁の句とりとも是あまよく兵列して徳とす一
又小神をとあるもありとの字もすれハか又た翁能
考一

むあやめさそきんうさ女うれ
あさうかみ我を飯くよ男うさ

ろ仙舟の小笛より法相客語とりひいつるわん情一
男小の句ハ晋子う夢くよ螢ゆとりよは應對の吟とを

これハくさばハ小蓮花 季吟

これホのちともりもみせふハ袴の袴のまゆあしん

丸筋ふつる峰く人々詳きとせしやらう公のしつハ己と

おのれも同なるんもあはれもあはれハ皆俳諧日用なり

あまりあはれりとの事のかりもあはれえ率よしてたきさん

疎きくともあはれ人多し片田舎の人代々より来る御

ととめ一飯と費し草鞋の資なると施さうと先客の吐

かひ句のこを試し日用の事探さむともせしあはれ年

け及み秋を損ひ食をむさほるといふともいふもの

官れて答の詳あしんとあはれえさし一忍し一問人の

なりしハ我ら仕合あてあはれし

近來あるの御の俳諧講終とさくしあててもさてもあはれ

句の評のこも事をよせし蛙花こむ水の音本槿ハ馬より

喰はたりたりして夜とあはれしぬ

け句講さるに世人の身よりあはれけおる杭うたるといふ或を
ねのうえあはれぬ花の香もあはれあはれ路のあまていおて句解せしと
もあはれあはれ禅僧の立て笑日僧はこれのこもあはれ句ハ信せたる
語ハ槿花今朝猿摘去といふありあはれあはれ意ハ是あはれあはれと
いふ講師赤面せしと

刻言此の句の深意なるハいあはれ五年もあはれあはれなり

説とも同くハかるとあはれ僧の諺言ハいといふく説きうすあり

あはれ後かきさき傳授なるといふハ俳賦の憂名ハ微心すも

あるうし法華はこれとあはれせぬ垢のぬけぬといふとあはれ

かゝるつゝまたつゝを尚し不意業の人をこれと土臺のほ
ちゝぬともふゝゝ

落句は体と事との差別ありたるを

山里の林は告よせ堦

鞆壺は小坊ののるや大根引

ととろかるるといふてつせをわるといふてせをわるといふ
よて体と事との大根引は二句みかきつゝは句毎
よとあり林はさつげよせ堦人とわめてせをわると
大根引の句はいつてたきをたきつゝは句みかき
大根引とつゝは句とつゝは句の如歌の例のよとつゝは句あり
より考へてつゝは句

菘の句多う中に

菘のみかゝる菘と菘は落月夜

菘のよやなつゝは古た佛たち

芥焼やすを痴の田井の初氷

けいりなと初葉の人を解つゝは意なつゝは菘の句解
乃集あはれ菘の句はけいりなと解し著るは菘や
芥やまの句あはれ菘の句はけいりなと解し著るは菘や
よとつゝは句はけいりなと解し著るは菘や
俳諧の俗をよとつゝは句はけいりなと解し著るは菘や
他せつゝは句はけいりなと解し著るは菘や
すゝゝは句はけいりなと解し著るは菘や

つゝおもひよそくけり菊と若やまきかもの風流を移きて
和歌連歌の人を睨ますとも恥つゝはとよあそとに
嘘をこむ本槿ハ馬は講釈よりも劣て御りの助と
あらんハらんホの句解なまらん―義の道德の觀相
容易の人の及ぶくもあらん―は境よりく弁別を
らんき花多風月の歌あそむ

檜柳の志のつを月の名好む 翁

は句志好むハ何と後の月とえ一人もあり各人の佳意
よく探念―

予或人は同今世の俳諧漢句ハ連歌めまゝ漢句あるを
も一人連ハ連也俳ハ俳也是ハ連歌なりといふといふに

答曰いふへき連歌の中より、詠諧とて歌―をいふは
俳言と云ものなくてハ連俳つゝらんをせは為俳諧中
興の用祖として列するゝの一派をいふは、志好む
これら者流は云あるかとの句く皆俳諧体なりと
又或人は同フ答曰正論俳諧連歌の上はたすらんも
連歌まいたれぬ俗情の風流をわらん―連歌を所せん
かとの句あるを全俳諧の功なりすやらんゝのあより
連歌の句いらん時連歌のあよりそハ連歌なりといらん
らんさ乃と口惜くも彼あらんもあらん―和歌ハ詠諧
躰あらん連歌も混濁すいらんらんや連歌師の
混濁めく句いらん時は方よりもそハ俳諧めくといらん

をかきうきうきうき

は二評いつれうきもとまめつて

一とくの雨降るくすさるまき家 作者不詳

けか句ハちちけ句主の門人の他せしなりとあるに
門人の句意を言ふかく日毎くは雨降るくくくハ
雨のたのも盡そんと思ふ俗情よりいひくはより
師ハこれと風情よすなきし新日毎く降るくくま
まふふ雨降るは八月のむくもあるまふれいらま
けしをまそ降るくくく入するところか一とくの雨の景お
とと深くたまひ深くまなうこれと降る牙子の句は
棄て已うてくくせり源後頼朝臣の風情をくくは

例もゆれも大切の秀吟ささうり不堪の人の口も墮さ
ともせしあんいと面ふき祝切最をくくちなるる
學者皆時も忘ちくまふなり

雲も秀も月もからあくくま

忘れても縁縁を客のまめく

けきい角とあくおれおまう

あてふ拂ふ砌乃押るれ

折やの連歌のか句いりたりも傳るがる句俳諧より
いいてく人そハ連まて俳の口質ハありと答んや
名月や月の中なるるのく

けくく月くこの中なるるなりてあハ連歌の句と

りつゝまづ俳諧とらふてまづ西土人の和歌も花の上とく
俳士をつりまじり月とてんを以て越の松とて曲節と
つとてんをり山家集或本とて中よはといふこととて
も然いふことありもあはるゝ萬葉の中よはにあり

あのか句雲霧を月とてかかせそを月かかるとて雲霧
として秋の月能清えをかくやせし後之句も又曲節
乃巧あるとてよ連歌とてもかゝる能意に有ものを
のあゝといひやすらうといひたうとも自然の句をよめる
やうもゆるんやすらうにもやすらうあり有るありあり
のあゝわゝむさむとを言とてめ十哲ならうといふ人の句に
ふ湯と飲とくの後句ハ一句にてもんえんよく思ひ

つらゝゝゝゝてまひゝをりの論を熟讀すゝゝ

俳言とのよとてんは後者ゝゝ支考り私に著せる二十五條
乃後端の俳諧ハ何のよめするものかと俗談平話とて
さんうゝめなりは正すといふもの俳言といふものの大論に
して一節一夕の說盡すを辨別するもの萬葉の和歌
多くハ俗談平話也俗中の俗談とのありては俳言
とするもの忌癆なりよく正して用捨をゝゝむゝゝ

あゝゝゝの血もありとてまひり

とりよ續句も宗因俳言なりとて俳言せゝれゝゝゝ
俳力俳情詞のといふこと俗談とて事有り

安藤冠里君の法館にて其角を判者として三十六番の

鶏合乃句合真一なるる中よ

陸奥掾の禿ろろんていさ合 冠里

け清句か来一み沾州ハきけきこえ一者なれある月
内籠へるあられ内句の評なとまをせしけに州日あつれ
乃内化意なうく陸奥とのとて遊されへくやとち上げる
君仕けるハ州ハけ道旅疎とち一う俳志み疎くをれ
そ方なとち目来むつ縁といつて句あ向てハ居とも何とも
せよ自分なとハあく陸奥とのとてむつ縁こそ俳諧
なれと笑しせ給々れえ別ハつてあつて汗して詞なり一
とそ俳言といふやまハこれあもよりまなまにちもあらん
君の伊せめて并承堂もをさういふより

あまみさ一あ一曳の山路や 貞澄

あまみさ一あまみさゆんくそまおらほく一の山路や
さ一は一言の俳諧秀作とらぶ一
けうなと連歌師のま〜人連歌めくといえんや詞もといふ
そらも俳諧なるを志れ

直鳥よ直鳥せもれとこの山

せもものといふ詞意あても味一
名月や月不が花身か々ふの月後の月といふも俳言とハ
いふもあ〜一の月後の月といえんハ句よさうらね
有くまものろ中秋高夜を待宵といふうこハ意の詞なること
休まりてそ来ませはさんとも不案の人き小る月とさ(一)一

何と證とするやいさや牽らむる月の駒とよめ歌と十五夜
とあやまりしるやかほも連歌者流の相笑なるも俳諧乃
眾も落すしる連歌の帳屏風の類も紅梅をくねるあ
梅ともいしぬる石竹をいしるのくハ連歌よりも俳諧乃
方り自在ありん

又いさよの月とまの月といさよの月といさよの月といさよ

ま朝歌の秋風またたひく雲とあやして峯をよらふいさよの月

いさよの月や海光煮かとの音の園

竹音や登を二見へた考いさよ 晋子

海光あるいさよの月とまの月といさよの月といさよの月といさよ
ゆらとんありてせしあひん

いつれの年の中秋も嵐雪氷壺の筆くちつとひて舞のこ井まの
門たつたやまの月とまの月といさよの月といさよの月といさよの
山も登る月のかしおとのをむる嵐雪志きりも夢あけは
人こえてこハ何事りうといはて後なく門さす時なりと叫
ゆる嵐いよくはなちとまははなふうとく(えこしうなるすす
あしはしうと笑ひを催ししりとをうしき遊ひなりし
うの並居てかこらふしちむとり嵐も向て問題ありこくおれる
といさよといさよといさよといさよといさよといさよといさよ
菅相承の浄霊横川尊意僧正の浄館みて棲戸を集し
けし果石榴なれもなり柿もても抽もても火焰似合し
うしはこしよて知しと語けるとそ真ある話なれはこに

かゝぬ始る句も題のうらくせむるといふ論を不埒の人のよきん
傍題落題の病ハ俳諧漢句のみもくはあまき也

ある人麦林舎へ来てて由ハ俳諧夢ハんころをのそむあり主
いふおまひらんけつハ業ハいつれおと云米穀を瀦常なりと答
主傍の小童を招て押あやの抱み米粒を入れて容の希み
これハ何處の産なるやと問ハ客志をくちちて何處の産産め
よき米をくちと云主曰俳諧とて別よあつた風流を四季乃
造化物を散なりまのたつものハ体を探麦前ハ升を抱く
蝶ハ菜畠のくふ屋をわてあまなく蟬ハ辛勞して衣を脱
しそめて樹上ハ遊吟寸題とするに草を山路をささく
龍膽ハ中末もあまのいぬましく抱く歌とそふいん牡丹も

芍薬も花の運迷ありを菖考尾花も趣向の見入ありて句の
姿情とまなれるなりけつハいふ業の米とくえつハ眼
なつた風志たもいもよるけつハ方とあつたを客ハ歸
されしといつや伊勢の人乃詔とまおけりたを浮草の
あちこちとあまよふまてめとめ一達人をてハを

其角ハ徒三四字をそりて雨のつひくとなくまめけるま
嵐雪来て曰ふハ杜鰲の句ありかたをいふハ利休のねと
一穴として二孔ハ三字をいふハり人ハ助言ハけりねと云
晋子完ハと付雪曰ふものハけり也かつた又あらんそるに
け二字考始ハハとておけりけりて晋曰雪ハ句を成就せし
句もて我くと試なりいさけ二字紙を去韻塞のとくハ

雪のりうおのひよりとくく人んそてかたふんいおやれとん
かそふかくてなとさるるもあふとと晋子のうやとて
ふせもあふ雪を待雪のまきり影いせとて人るに晋の
おせり雪う茶も遠いざりたれと雪よふらひ笑つてとて

鳥鶴なくと人のいへとやさやとあり

いへとやの初め風像を初へい吟と主として佐登水鶏

塚造立の時加賀小松梅林院主能俊聖廟守護の人也のよの京へ

登とていあをそふりあふとと佐登の人と俳諧り御の人と

そらへも向の句をいれそらや有とむ

うひなうくくとひり人乃水鶏塚

とくそそいへ予とと院を訊ひい受まみえ

時何れとなく話のあみせれはる嫡子由順とて家お候
の人なり祖父能舜世にいあふりり一時え禄二と一蕉翁
真羽り御の及乃次能舜俊小對話ありに翁主に
對し此かとの出極きさうらひやあそくそとあるに

秋風を芒くちうゆゆあふか 能舜

ときろえけるに翁あど歎羨あふらうパとにのてあふ
乃さうひ風後者一幸とも由順ぬ一かたりきうされはる
又の日は父子ふあみえゆりて後夕哉田の幸なと取一
傍み干隣なるもあありて予も好色毎飽之謂流とふ
とて題をかしてか句のそむ予たもよ肯あはれまに

あふそめあふさうとをわあふ

と物に化ておしぬある一の雙大も不真一いを物に化て
さういふの族法外の哉留を来きさやいふに化て新様
のさもありハすまやおもはさるの歎ハ身のさる
さつゝの嘆息ありはとさつゝは物一もさる牡丹花
肖柏のか句なりとて

山陰ハいぬ月乃又えぬ

とらふ句ニハ是連歌漢句の中もいふ一より二句と
なふ句までいぬと不のぬをたき又又えぬふと
とむるさるも嘆息嘆羨の爲意の哉なるより
一句も身化のまきいぬをたき

りも物さふ控灯そつ 性 羊素

何人乃度寸産既そさより一ハ 化さる
いふ句よくおもひめくす一又おもひをる嘆息乃
句ありきよけ意を借くけを哉とありも慣持あり

けころもにつみてぬく鴨の足
うひすやねもいぬさる夢のさき 祇徳
はたらひいうさるも有一十八十九てまたさるより
りて考一

雅話終

さい志を至後序

籟毛の調々おのつゝも管々あま
色を「息のうちにあまくさるゝの長短ハ
意平ありてよく和するをたへハ風律に
きふふとくハ万代諧ふり此うへハ不寂
際まゝ志也句を自然トあま句平色
あゝらさいふしくさるゝに強弱ありハ禁也
よくとこのふとまゝを甘き平玲瓏とて

四表とておのろく世人富榮と圖く唯も
響乾子とてとまよふものぞ恐くハ非
ちよおの多ふせしれとて是子
准く此寂榮のさひ志をりありと志ふ
道の榮ちり本は察せよ

壬午永丙申春二月 暮雨卷



